様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 ２５ 日現在

機関番号：３５４０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０３０００

研究課題名（和文）多読授業における疑似初心者の英語文法発達ー動的用法基盤アプローチ

研究課題名（英文）L2 English grammar development of false beginners in an extensive reading program: A dynamic usage-based approach

研究代表者
戸出　朋子（Tode, Tomoko）

広島修道大学・人文学部・教授

研究者番号：００４１０２５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：英語と類型的に異なる日本語の影響で，英語の主語の習得には困難が伴う。「具体的な言語事例をユニットとして処理し繰り返す中で文法が創発する」とする用法基盤言語学に依拠すると，入力中の事例の質と量が重要で，教育アプローチとして多読が挙げられる。本研究では，多読図書のテキストの頻度分析と多読に取り組む高校生が多読後に行う筆記産出の分析を行った。
多読用図書は，指示対象を具体的に特定できる用法で始まり，同じパタンの繰り返しの中で，徐々にメタファ的表現に移行するという理想的な入力源であることが示された。多読後の筆記では，入力事例を取り入れながら，事例基盤的な発達が見られ，レパートリーの広がりが見られた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
多読は英語学習を促進させる有効な教育アプローチということは我が国で認知されているが，その有効性を，世界的に注目を集めつつある用法基盤言語学の視点で，多読教材及び多読に取り組む学習者の筆記産出を分析し，事例基盤言語発達を示した点に学術的意義がある。また，日本語を第一言語とする英語学習者にとって困難な主語の習得について，具体的な指導法として，教育現場に提言できるという点で社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：Previous studies have shown that learning the subject-predicate construction is not easy for many Japanese learners of English because of the typological difference. From the perspective of usage-based approach, the abstract subject-predicate construction develops gradually in processing instances in language use. One of the usage-inspired approaches to pedagogy is extensive reading.
This study firstly conducted frequency analysis of usage of the subject in a series of levelled readers for extensive reading. Then the study longitudinally analyzed story production written by high school students engaging in extensive reading of the levelled readers. The results of the input analysis revealed that the levelled readers presented optimal input in which the subject usage began with easily identifiable subjects, more metaphorical usage gradually introduced. The production data revealed exemplar-based development in which the learners drew on concrete expressions in the readers.

研究分野：第二言語習得

キーワード：用法基盤言語学　多読　主語の習得

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

(1)　英語の主語・述語構造の習得がおぼつかない高校生や大学生が少なくないことが問題となっている。これは，英語と類型的に異なる日本語の影響で，主語の習得が困難であることが関係している。「言語は意味と形がつながったユニットであり，個々の状況の中で具体事例をユニットとして処理してそれを繰り返す中で，文法が事例基盤で創発する」とする用法基盤言語学を応用した習得研究（例，Tomasello, 2003）によると，豊富な事例体験の中で項目依拠構文（例，*we can* VP）が数多く形成され，そこからスキーマ化を経て抽象的な主語・述語構造が発達するという道筋をたどる。

(2)　教室で指導される第二言語習得研究でも，その大部分が事例基盤で項目依拠的に発達することが実証されている（例，Tode & Sakai, 2016）。これに基づくと，第二言語指導でも，初期は典型的で汎用性の高い高頻度事例に繰り返し触れさせ，徐々にタイプ頻度を増加して「入力の最適化」を図ることの有効性が唱えられている。この理論を背景とする指導法が，動的用法基盤第二言語指導（Verspoor & Nguyen, 2015）で，その指導原則は，①興味を持てる題材の入力理解，②同一入力に繰り返し触れさせる，③多語単位の内部構造や意味機能への意識付け，④発音指導と音読，⑤以上のことを行ったうえでの産出活動である。

２．研究の目的

本研究は，英語を外国語として学ぶ高校生を対象に，多読を入力源として，動的用法基盤第二言語指導を行った。研究目的は以下の通りであった。

(1)　多読図書を源とする入力中の主語の頻度は，どの程度最適化されているか。つまり，典型的で汎用性の高い高頻度事例から徐々にタイプ頻度の増加という流れで学習者は入力に触れていくことになるか。

(2)　学習者の英語主語・述語構造は，多読を源とする事例の記憶及び活用とどう関係するか。具体的には，多読テクストを源とした事例に基づく項目依拠構文が形成され，経験を積むにつれて項目依拠構文のタイプが増え，産出が英語主語・述語構造で占められるようになるか。

３．研究の方法

それぞれの研究目的に対して，次の方法で研究を行った。

(1)　英国の児童用英語絵本である *Oxford Reading Tree Series*（以下，ORT）を頻度分析した。ORT は，元来，英語を第 1 言語とする子どもたちが「本の読み方を学ぶのに使うレベル分けされた絵本シリーズ」（古川・上田，2011, p. 29）であるが，日本の英語教育では多読初期用の図書として，中高生さらには英語の苦手な大学生のリメディアル教育にも用いられている。ステージが進行するにつれて学習者はどのようなタイプの名詞類（nominal）をどれぐらいの頻度で主語として経験することになるのかを探った。具体的には，①主語主要部が普通名詞か，固有名詞か，代名詞かという観点でタイプ分けし，その頻度がどう変わるかを見た。加えて，主語名詞類と述語動詞の意味的関係において，②一致的かメタファ的かという観点でタイプ分けを行い，その頻度がステージごとでどう変わるかを見た。

(2)　私立女子高等学校の「実践英語」科目で ORT の多読を中心とした授業を行った。多読記録手帳を持たせ，読んだ本のタイトルや感想，気づいたことなどを多読後に記入させた。週１回の頻度で，授業の最後 8 分を使って，ORT の巻のうち，生徒が読んだことのないストーリーの絵のみを示し，その内容を表すストーリーを英語で書かせた。年間で 20 回にわたって，ストーリーを書かせ，これらを生徒の産出データとした。分析を次の２つの観点で行った。

①生徒の産出した項構造が多読からの入力に依存しているかを分析するために，トレースバック法（Tode & Sakai, 2016）を用いて分析した。例えば，生徒が Dad has a frying pan という文を産出したとすると，その文と近似している節を，その生徒がそれまでに読んだストーリーやその生徒のこれまでのストーリー筆記から探した。

②各生徒の各回のストーリー筆記の節を，ゼロ主語構文，普通名詞主語構文，代名詞主語構文に分類し，各構文の率を算出し，その変化を分析した。

４．研究成果

(1)　中学校検定済み教科書と比較する形で，ORT の頻度分析を行った。表１は，ORT における，ステージが進行するにつれての固有名詞主語，代名詞主語，普通名詞主語の累計トークン頻

度と累計タイプ頻度を表したものである。どの区分でも固有名詞主語が高トークン頻度で用いられていることが特徴的で，代名詞主語と合わせて，8 割あるいは 9 割以上を占めていた。その後，徐々に様々な普通名詞が主語として現れたが，少なくとも初期段階は，指示対象が特定可能な普通名詞主語が高い頻度で用いられていた。

表 1 ORT における各種主語名詞類の累計頻度

		S1	S1-1+	S1-2	S1-3	S1-4	S1-5	S1-6
累計トークン頻度	固有名詞	7（35%）	108 (39%)	343 (44%)	509 (43%)	845 (43%)	1391 (37%)	1900 (35%)
	代名詞	13 (65%)	159 (58%)	349 (45%)	515 (43%)	804 (41%)	1730 (46%)	2554 (47%)
	普通名詞	0 (0%)	9 (3%)	89 (11%)	169 (14%)	299 (15%)	630 (17%)	987 (18%)
累計タイプ頻度	固有名詞	4（50%）	7（32%）	17 (24%)	25 (24%)	34 (23%)	55 (22%)	76 (22%)
	代名詞	4（50%）	11 (50%)	13 (18%)	14 (13%)	14（9%）	17（7%）	23（7%）
	普通名詞	0 (0%)	4（18%）	42 (58%)	67 (63%)	102 (68%)	179 (71%)	240 (71%)

注：S = Stage

ORT では，同じパタンの繰り返しの中で一致的表現からメタファ的表現に移行する流れで初期段階からメタファ的主語が用いられている。そして後の段階で頻度が上昇するが，同じ表現が高トークン頻度で用いられていることが特徴的である。

一致的かメタファ的かという観点に関しては，ORT では，同じパタンの繰り返しの中で一致的表現からメタファ的表現に移行する流れで初期段階からメタファ的主語が用いられているということがわかった。例えば，「The shell had legs.」という文法的メタファの場合，その前に「She had a crab.」などの人主語の一致的表現が同一パタンで繰り返し用いられ，その中で文法的メタファ主語に徐々に移行していた。そして後の段階でメタファ的表現の頻度が上昇するが，同じ表現が高トークン頻度で用いられていることが特徴的であった。以上のことから，ORT では，英語の典型的な事態認知を具体的な世界で直接的に学習者に体験させる入力となっており，英語の主語・述語構造を習得させるのに適切な入力素材であることが明らかになった。

(2)　ORT の多読を中心とした授業で，生徒が書いたストーリー筆記を分析した結果，以下のことが明らかになった。

①　ストーリー筆記を英語の項構造の正確さという観点で採点し，多読開始前（学期開始時）と学期終了時の得点をウィルコクソンの符号順位検定で検定したところ，有意な伸びが確認された（$z = 5.124$, $p = .000$）。生徒の中で，伸びが顕著であった個人 2 名の英語項構造産出の源をトレースバック法によって探った。この 2 名に見られた共通点は，飛躍の直前に，has を含む SVO 節が出現したこと，そしてその前から過去形 had を含む多くの事例に多読や全体指導の中で触れていたことであった。その has を含む事例の出現後は，過去に体験した事例を基にした置き換えなどの操作で可能な産出を行い，has 以外の動詞を含む英語語順の産出へとつながっていた。言い換えれば，自分でパタン・プラクティスを行っているかのような産出であった。これは，高トークン頻度事例がアンカーとなり，徐々にタイプ頻度が増加していく用法基盤の言語習得を思わせる軌跡であった。

②各生徒の各回のストーリー筆記の節を，ゼロ主語構文(Zero S)，普通名詞主語構文(Noun S)，代名詞主語構文(Pro S)に分類し，各構文の率を算出した。年間 20 回書かせた中で第 1 回と第 2 回のストーリー筆記の得点（主語を使うことができている構文の率）を基に，クラスの生徒を上位群(8 名)・中位群(9 名)・下位群(10 名)の 3 群に分けた。各群で，ゼロ主語構文，普通名詞主語構文，代名詞主語構文の率が 20 回の筆記を通してどう変化するかを，グラフにプロットした。図 1 が上位群，図 2 が中位群，図 3 が下位群の各構文の軌跡である。

図 1　上位群の軌跡

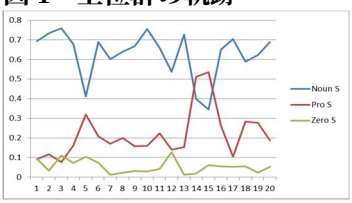
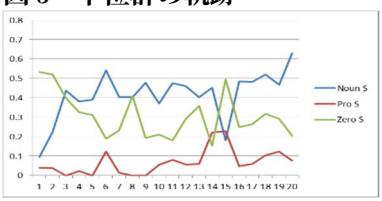


図 2　中位群の軌跡

図 3　下位群の軌跡



上位群は最初から，普通名詞主語か代名詞主語を使えており，ゼロ主語構文はほとんどないことがわかる。中位群は，初期は普通名詞主語構文とゼロ主語構文が競合している。しかし，経験を

積むにつれて徐々に代名詞主語構文を使えるようになり，3 つの構文の競合が見られるようになった。下位群に関しては，最初はゼロ主語構文に占められており，すぐに普通名詞主語構文が現れ両者の競合が見られるようになったが，代名詞主語構文の使用は非常に限られていた。さらに典型的な軌跡を取った中位群の生徒 2 名 A と B の具体的な産出の変化を調べた。具体的には，最初，代名詞主語を使えなかった二人の産出が，どのような環境で使えるようになったのかを，その前の言語経験や教師からのフィードバック，筆記後の振り返りのコメントを調べた。その結果，代名詞主語の出現の前には，教師が代名詞を使用するようにとのフィードバックを与えており，それを受けて代名詞を使ってみようとする主体性が，生徒のコメントから見て取れた。

＜引用文献＞

① 古川昭夫・上田敦子（2011）.『英語多読入門』東京：コスモピア

② Tode, T., & Sakai, H. (2016). Exemplar-based instructed second language development and classroom experience. *ITL–International Journal of Applied Linguistics, 167,* 210-234.

③ Tomasello, M. (2003). Constructing a language: A usage-based theory of language acquisition. Cambridge, MA: Harvard University Press.

④ Verspoor, M., & Nguyen, H. T. P. (2015). A dynamic usage-based approach to second language teaching. In T. Cadierno & S. W. Eskildsen (Eds.), *Usage-based perspectives on second language learning* (pp. 305–327). Berlin, Germany: Mouton de Gruyter.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 戸出朋子	４．巻 50
２．論文標題 中学校検定済み教科書における主語ー用法基盤モデルを援用した頻度分析ー	５．発行年 2020年
３．雑誌名 中国地区英語教育学会誌	６．最初と最後の頁 79-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18983/caselejournal.50.0_79	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Tomoko Tode & Kyoko Otsuki	４．巻 30
２．論文標題 Measuring syntactic complexity of beginner-level EFL learners	５．発行年 2019年
３．雑誌名 Annual Review of English Language Education in Japan	６．最初と最後の頁 49-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20581/arele.30.0_49	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 戸出朋子・麻生早紀	４．巻 58
２．論文標題 高等学校多読中心英語授業における疑似初心者の構文学習―大学と連携したアクションリサーチ―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 広島修大論集	６．最初と最後の頁 27-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15097/00002624	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　1件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 戸出朋子
２．発表標題 用法基盤アプローチの多次元性ー多言語能力発達研究に向けて
３．学会等名 日本第二言語習得学会（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Tomoko Tode
２．発表標題 An adult immigrant's chronotopic identities: Language play in classroom interactions
３．学会等名 Initiative for Multilingual Studies（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 戸出朋子
２．発表標題 Leveled Readersは如何に主語習得を促すかー事例基盤習得の見地からのテクスト分析ー
３．学会等名 JACET,文学研究会多読セミナー
４．発表年 2019年

１．発表者名 戸出朋子
２．発表標題 言語分析力の弱い学習者に必要なテクストとはー事例基盤主語習得に焦点を当ててー
３．学会等名 第50回中国地区英語教育学会広島研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 戸出朋子・大槻きょう子
２．発表標題 動詞項の観点で見る統語複雑さ指標 ー英語学習不振者を中心に―
３．学会等名 全国英語教育学会第44回京都研究大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Tomoko Tode & Kyoko Otsuki
２．発表標題 Dynamic competition of old and new constructions: Group-level and individual-level analyses of intra-individual variability
３．学会等名 American Association for Applied Linguistics, Atlanta 2019（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 戸出朋子・麻生早紀・木村彩音
２．発表標題 高等学校における多読指導を軸とした構文学習―生徒と教師の変化
３．学会等名 日本多読学会年会
４．発表年 2017年

１．発表者名 戸出朋子
２．発表標題 多読中心授業における事例基盤の英語構文学習過程―主体的「パタンプラクティス」―
３．学会等名 第43回全国英語教育学会島根研究大会
４．発表年 2017年

１．発表者名 戸出朋子・大槻きょう子
２．発表標題 日英認知モードの違いから見た英語文法発達指標の検討―英語学習不振者を中心に―
３．学会等名 大学英語教育学会応用認知言語学研究会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	大槻　きょう子 (Otsuki Kyoko)		
研究協力者	麻生　早紀 (Aso Saki)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関